

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国语大学



要覧 2001

目 次

概 要

歴史と性格	1
研究組織	3
研究組織構成	4
所 員	6
運営諮問委員・専門委員	7
歳 出	8
卓越した研究拠点(COE)	9
情報資源利用研究センター	10

研 究 活 動

共同研究プロジェクト	12
国際学術交流	24
長期研究者派遣	27
短期共同研究員(公募)・大学院・研究生	28
言語研修	29

施 設

情報資源利用研究センター	30
図 書 室	31
音声学実験室	32

表紙写真説明

忍耐強い働き者の肖像

マイソールの牛は働き者。牛乳を供給してくれることはいうまでもなく、1頭あるいは2頭立ての荷車で、麦わらの山から長いビニールパイプに至るまで様々なものを運ぶ。牛車が4車線完全舗装の目抜き通りで車やオート・リクシヨー(自動三輪)やバイクに混じって信号待ちをし、あるいはロータリーを颶爽と回っていく様は、のどかでおおらかなこの街の風景に似つかわしいものに映る。牛たちは尊ばれるに十分な働きをしているのだ、それも町の日常の中で。

(2000年11月18日、インド、カルナータカ州マイソール市アショカ通りにて、澤田英夫撮影)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES
4, NISHIGAHARA, KITAKU, TOKYO 114-8580
TEL:03-5974-3667
FAX:03-5974-3838

歴史と性格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、我が国ではじめての共同利用研究所です。共同利用研究所の使命は、共同研究を推進するとともに、全国の研究機関に所属する専門の研究者のために設備や資料を提供し、研究交流の機会をつくり、それによって研究の進展を促すことです。

戦後の復興が進むなかで、日本の運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに、1961(昭和36)年に日本学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設置するように勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964(昭和39)年4月1日、本研究所は東京外国语大学附置の全国共同利用研究所として発足しました。本研究所の設置目的は、次のようにまとめられています。

- 1) アジア・アフリカの諸言語の研究、およびそれらを通じて、アジア・アフリカ諸地域の歴史・社会・文化を直接研究すること
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典をつくること
- 3) それらの言語修得を助けるため、言語研修を実施すること

以来、30年以上を経過して、本研究所を取り巻く諸事情は大きく変わりました。学界では、人文・社会科学の分野で、言語学・歴史学・人類学などのよう、すでに確立している学問体系に依存した個別的な研究分野をのり越えた新しい学問・理論構築への要請が高まってきました。それは近年における国際化、地域の枠組みの流動化、民族・宗教問題の激化、都市化現象の進展などの急激な世界情勢の変化、および、狭い地域的枠組みにとらわれない広域な視野からの研究の必要性に対する認識の深まりなどと関連しています。他方、最近における情報処理技術の発達のなかで、文字のみならず音声や画像の処理が可能になり、さらに、これらを個別の情報としてではなくひとつの情報ネットワークに統合化する研究が急速に進展してきています。

このような学問的・社会的要請、アジア・アフリカ地域の社会情勢の変化、科学技術の発達に対応して、本研究所は1991(平成3)年度に、研究体制の抜本的見直しをおこない、従来の16小部門・1客員部門(外国人)を、4大研究部門・1客員部門(外国人)に再編成しました。4大研究部門では、言語を媒介として成立している文化を総合的に研

究する学問である「言語文化学」理論の構築，広域的なフィールドワークや共同研究の実施，情報の統合的処理のための理論と方法の開発などをめざしています。

また，東京外国語大学に1992（平成4）年度に新たに設置された大学院地域文化研究科博士後期課程を全面的にバックアップするために，多くの教官が参加し，教育活動にも力を注ぎはじめています。本研究所は，「中核的研究機関支援プログラム」の1995（平成7）年度の発足以来，「卓越した研究拠点」（COE）に指定されており，加えて2001（平成13）年度には，2005（平成17）年度までの5年間にわたる中核的研究拠点形成プログラム「アジア書字コーパス拠点」が新たに発足し，従来にもまして，アジア・アフリカ地域の言語文化研究において先導的役割を果たすことになりました。

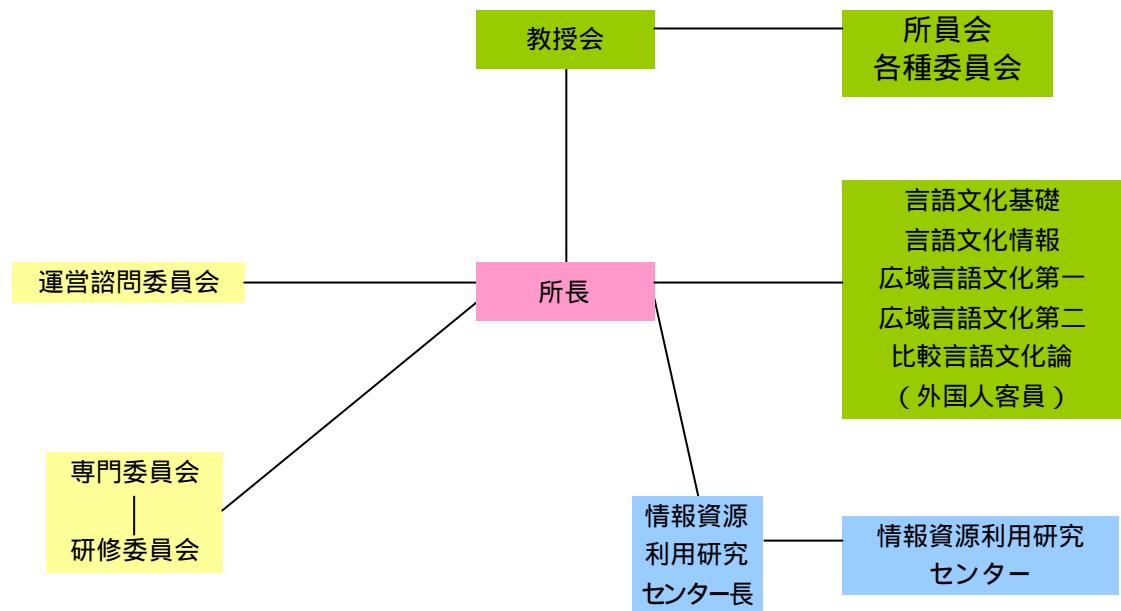
さらに，情報ネットワーク化のめざましい技術革新を活用したアジア・アフリカの言語文化資料の情報資源化のために，1997（平成9）年度より附属情報資源利用研究センターを設置し，共同利用研究所としてのさらなる発展をめざしています。

以上の活動を充実させ，我が国における言語文化研究の発展に貢献することが，本研究所の責務であり，所員一同の願いでもあります。

歴代所長

岡 正雄	1964-1972年
徳永康元	1972-1974年
北村 甫	1974-1983年
梅田博之	1983-1989年
山口昌男	1989-1991年
上岡弘二	1991-1995年
池端雪浦	1995-1997年
石井 淳	1997-2001年
宮崎恒二	2001年-現在

研究組織



(2001年4月1日現在)

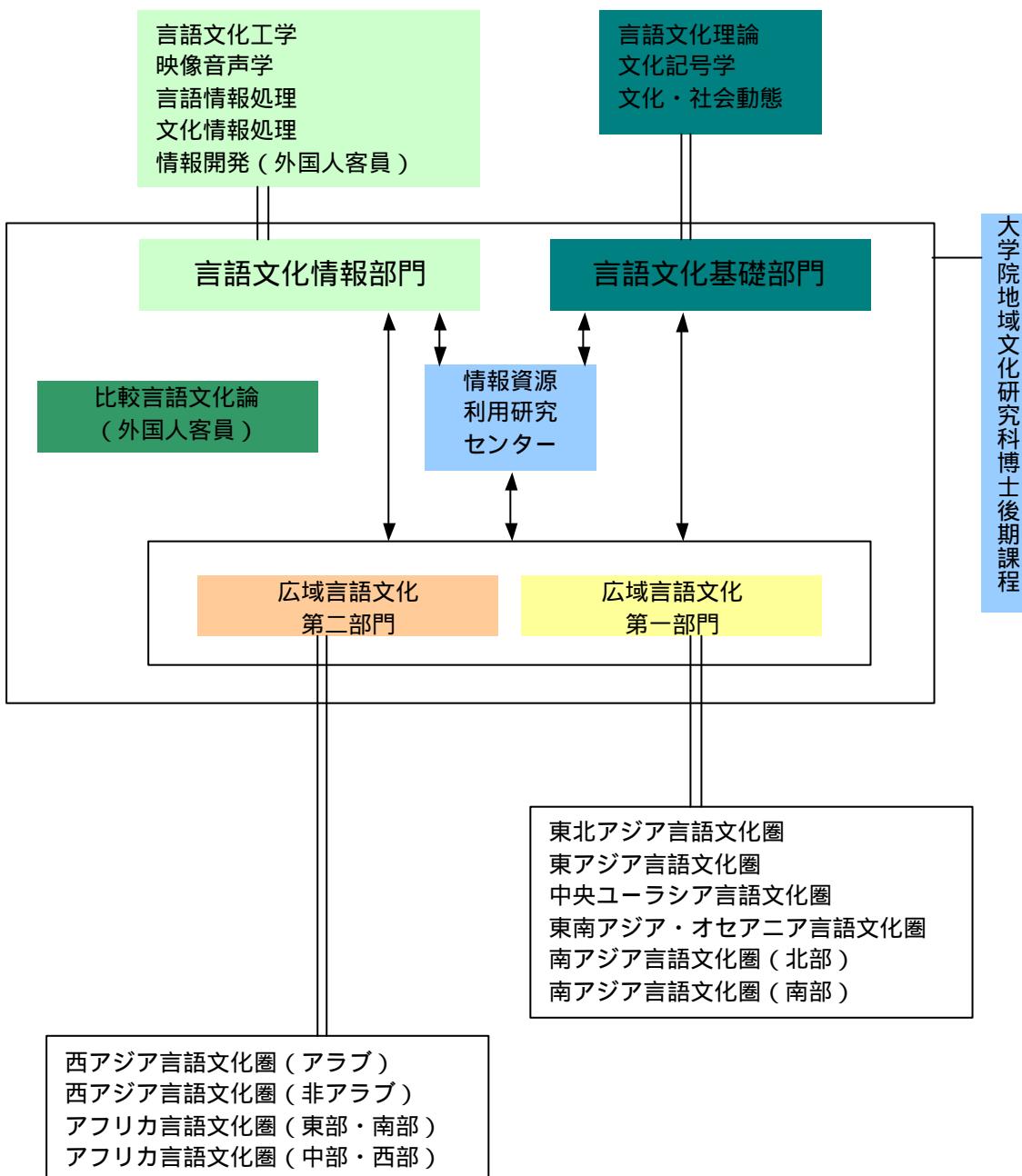
区分	教授	助教授	講師	助手	計
定員	(5) 19	18	0	6	(5) 43

()は外国人客員数を外数で示す

研究組織構成

部門名	研究分野	研究内容	所属研究者
言語文化基礎	言語文化理論，文化記号学，文化・社会動態	言語文化学の構築を図るためにアジア・アフリカの言語文化を比較・分析し，歴史学文化人類学，言語学など関連諸研究分野の成果を統合して理論化する。	町田(センター長/併任)，松下，家島 飯塚，真島，峰岸 吳人
言語文化情報	言語文化工学，映像音声学，言語情報処理，文化情報処理，情報開発(外国人研究員)	アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理と新しい情報処理システムの構築，および情報処理した言語文化情報の提供，共同利用・公開のための手法を開発する。	加賀谷，中嶋，中見，芝野 小田，菊澤，澤田 Subbarao K. Venkata (外国人研究員)
広域言語文化第一	東北アジア，東アジア，中央ユーラシア 東南アジア・オセアニア，南アジア(北部) 南アジア(南部) の各言語文化圏	東はオセアニアより西はフィンランドあるいはインド亜大陸までを対象とする。人，物，情報の移動，流動化・多様化に対応し，学際的研究をおこない，フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに，収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	池端，石井，新谷，ダニエルス，内藤，宮崎(所長/併任) 栗原，西井，森，三尾，床呂 陶安，塩原
広域言語文化第二	西アジア(アラブ)，西アジア(非アラブ)，アフリカ(東部・南部)，アフリカ(西部・中部)の各言語文化圏	西アジア，アフリカ言語文化圏を対象とする。人・物・情報の移動，流動化・多様化に対応し，学際的研究をおこない，フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに，収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	内堀，小川，梶，黒木，高知尾，永原，羽田，深澤星
比較言語文化論 (外国人研究員 * COE 分)		言語文化学の確立を図るために，外国人研究者(特にアジア・アフリカ諸国)を客員教授として招へいし，共同研究を推進する。	Diouf J. Léopold Ileto R. Clemeña Zhukova A. Nikodimovna Kansakar T. Ratna
情報資源利用研究センター		アジア・アフリカ言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と，それを活用した共同研究手法の開発・国際学術交流を推進する。	バースカララー才，高島 豊島，根本，本田 Breen J. William (外国人研究員)

動態的なアジア・アフリカ言語文化学の構築をめざす研究組織構成図



所 員

所長（併任）教授 宮崎恒二

教 授

- 池端雪浦：フィリピン近・現代史
石井 淳：南アジアの人類学
内堀基光：東南アジア(マダガスカルを含む)
民族学，宗教人類学
小川 了：国家とインフォーマルエコノミー
(アフリカ)
加賀谷良平：音響音声学，アフリカ諸言語
梶 茂樹：バンツー諸語，言語人類学
芝野耕司：マルチメディア・データベース論，
多言語処理論
新谷忠彦：言語哲学
- クリスチャン・ダニエルス：16-20世紀中国史における社会，
経済および技術
高島 淳：言語情報処理，ヒンドゥー教
内藤雅雄：インド近・現代史
中嶋幹起：東アジアの諸言語
中見立夫：内陸・東アジアの国際関係史
ペーリ・バースガラーオ：南アジア諸言語，音声学
町田和彦：ヒンディー語
松下周二：アフリカの言語
宮崎恒二：オーストロネシア諸社会の研究
家島彦一：インド洋・地中海の海域史に関する
基礎的研究

助 教 授

- 飯塚正人：イスラム学
小田淳一：計量文献学
菊澤律子：オーストロネシア諸言語
栗原浩英：ヴェトナム現代史
黒木英充：東アラブ近・現代史
高知尾仁：世界表象と象徴性
床呂郁哉：東南アジア島嶼部の人類学
豊島正之：中世日本語文献学
永原陽子：南部アフリカの歴史
西井涼子：東南アジア大陸部の人類学
- 根本 敬：ビルマ近・現代史
羽田亨一：サファヴィー朝文化史研究
深澤秀夫：マダガスカルを中心とするインド洋海域
世界の社会人類学
本田 洋：韓国・朝鮮の人類学
真島一郎：西アフリカの人類学，フランス帝国
主義史，情報社会学
三尾裕子：東アジアの人類学
峰岸真琴：オーストロアジア諸言語
森 幹男：インドシナ比較文化史

助 手

- 吳人徳司：言語学，チュクチ語
澤田英夫：カチン州および東北インドのチベット，
ビルマ系言語
塩原朝子：インドネシア諸言語
陶安あんどう：中国法制史
星 泉：チベット語

運営諮問委員・専門委員

運営諮問委員

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての機能を適切に遂行するために、これとは別に運営諮問委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針など重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営諮問委員には所外の学識経験者など 15 名以内が委嘱されます。2001 年 4 月～2003 年 3 月の運営諮問委員は現在以下の通りです。

石井米雄	神田外語大学長 (京都大学名誉教授)	柴谷方良	神戸大学教授
大塚柳太郎	東京大学教授	長野泰彦	国立民族学博物館教授
川勝平太	国際日本文化研究センター教授	原ひろ子	放送大学教授
古賀正則	一橋大学名誉教授	毛里和子	早稲田大学教授
坂村 健	東京大学教授	渡邊興亞	極地研究所長

専門委員

所長の諮問に応えて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。2001 年度の委員は以下のとおりです。

研修委員会

大江孝男	東京外国語大学名誉教授	橋本 勝	大阪外国語大学教授
上村隆一	北九州市立大学教授	林 徹	東京大学助教授
柴田紀男	天理大学教授	三谷恭之	東京外国語大学教授
清水克正	名古屋学院大学教授	宮岡伯人	大阪学院大学教授
富盛伸夫	東京外国語大学教授 (同大副学長)	宮本正興	大阪外国語大学教授

歳 出

国立学校特別会計

(単位：千円)

区分	平成 9 年度	平成 10 年度	平成 11 年度	平成 12 年度
(項) 研究所	907,919	946,149	980,643	912,492
人件費	641,364	661,809	688,204	534,997
物件費	266,555	284,340	292,439	377,495
(項) 施設整備費	59,500	37,715		
(項) 国立学校		4,637	6,941	7,482
(項) 産学連携等研究費		162	2,220	2,220
計	967,419	988,663	989,804	922,194

科学研究費補助金受入状況

(単位：千円)

区分	平成 9 年度		平成 10 年度		平成 11 年度		平成 12 年度	
	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額
国際学術研究	4	38,170	6	59,900				
基盤研究(A)	1				8	71,100	8	59,700
基盤研究(B)	1		1	1,000	2	11,000	1	4,700
基盤研究(C)	3		2	2,400	1	1,900	1	1,500
奨励研究(A)	1		2	1,900	3	3,400	3	2,900
特定領域研究(A)					1	1,400	4	7,000
計	10		11	65,200	15	88,800	17	75,800

奨学寄附金受入状況

(単位：千円)

区分	平成 9 年度		平成 10 年度		平成 11 年度		平成 12 年度	
	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額
奨学寄附金	2	3,510	2	3,367	3	6,169	1	4,000

卓越した研究拠点（COE）

アジア・アフリカ言語文化研究所は、平成7年度の文部省「中核的研究機関支援プログラム」の発足以来、「卓越した研究拠点」（COE: Center of Excellence）に指定されている。本研究所では、このプログラムによる事業の重点を、学術研究の情報化と国際化に置いている。

情報化の側面では、インターネット等、情報化社会における新たな環境に対応すべく研究資料や研究成果のデジタル化による公開を進めている。平成7年度～9年度には「研究高度化推進経費」により、「アジア・アフリカ諸民族の画像・音声・テキスト・データベースの基礎的研究」を行い、平成9年度には「先導的研究設備費」により、「言語文化研究支援音声・画像信号等変換システム」を導入した。さらに平成10年度からは3年計画で「研究高度化推進経費」により、「アジア・アフリカ言語文化に関する電子事典の構築」を実施した。これらの研究を基礎として、言語学、歴史学、人類学の諸分野において蓄積されてきたフィールド資料（テキスト、音声、画像など）をデータベース化し、インターネットを通して公開する事業を推進することにより、アジア・アフリカ地域に関わる国内外の研究者に、良質かつ最新のデータを提供することが可能になってきている。

国際化の側面では、「国際シンポジウム開催経費」によって、国内外の先端的な研究を行っている研究者を招へいし、国際シンポジウムを開催している。平成8年度には「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」（8年12月3日～5日）、平成10年度には「音調の通言語的研究」（10年12月10日～12日）、平成11年度には「南アジアにおける言語接触と収束的発達」（11年12月6日～9日）、平成12年度には「音韻の通言語的研究」（12年12月12日～14日）を開催した。今年度は「非主格の「主語」をめぐって」（13年12月18日～21日）の開催を予定している。また、「外国人研究員経費」により、主として情報化の専門知識を有する国外の優秀な研究者を招へいし、所員との間で共同研究を進め、研究の情報化、国際化を推進している（24頁参照）。

このような事業を推進する上で、専門知識を有する若手研究者の力は欠かせない。「COE非常勤研究員経費」により採用された非常勤研究員は、各々の研究テーマに基づく個別研究を進めつつ、ネットワーク環境の整備、ホームページの作成・維持管理、データベース構築の支援、国際シンポジウムのサポートなどを行っている。

平成13年度からは、中核的研究拠点形成プログラム「アジア書字コーパス拠点」（GICAS: Grammatical Informatics based on Corpora of Asian Scripts）が5年間の予定で新たに発足した。このプログラムは、アジアの文字資料のコーパス構築を通じて、文字情報処理の技術的洗練、言語文化資源の情報化を行い、アジアの文字情報学の国際的研究拠点を確立することが目標である。

このように支援と形成という、卓越した研究拠点の二つのプログラムに関わる本研究所への期待は大きく、その責任も極めて重い。本研究所は、その重責を果たし、アジア・アフリカに関する言語学、歴史学、人類学、情報学などの分野の国際的な学術研究機関として、世界に貢献することをめざすものである。

情報資源利用研究センター



1. 設置目的

東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター(Information Resources Center / ILCAA, 略称 irc-ILCAA)は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流の推進を目的として、10年 の時限で、平成9(1997)年度に設置されたものです。

2. 研究所とセンター

本研究所は、従来から、アジア・アフリカの諸言語のデータをコンピュータ化し、それぞれの言語の音韻論的・統語論的・語彙論的分析をおこなうとともに、歴史学的・民族学的・社会学的研究等、多目的な用途に供するデータベースの充実を図ってきました。このデータベースは、本研究所の最も重要な事業のひとつである、アジア・アフリカの諸言語の辞典・文典の編纂の基礎資料を提供し、かつ全国の研究者の共同利用に供されています。言語データとしては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、フラ語、ヨルバ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語、満州語等が蓄積され、これと並行して、デーヴァナーガリー、ビルマ、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングル、モンゴル、西夏などのプリントアウト用文字フォントが作成され、利用に供されてきました。

3. 10年の活動

センターは、上記のようなこれまでの研究所の活動を基礎に、10年間で、下記の点で、理論・技術の整備・洗練をおこなうことをめざしています。

(a) アジア・アフリカの言語文化に関するコンテンツ公開の場として

所内には、上記のような言語データだけでなく、アジア・アフリカの言語文化に関する多様な資料(パンフレット、ポスター、フィルム、8ミリ、ビデオ、録音テープ等)が豊富に所蔵されています。このデータの所内・所外での利用は必ずしも容易ではなく、公開に向けた整備が緊要です。

(b) 国際的共同研究の場として

データベースを国際的に公開・共有し、それに基づく研究支援の環境をつくり、国際的共同研究の効率化と内容の充実を図ることをめざしています。

(c) コンテンツ蓄積・交換に関する基礎理論の整備母体として

通時的文字論を考慮した文字コード(符号化文字集合)論、多言語処理論、多表記系(スクリプト)の照合(collation)・整形・組版基礎理論等、従来、理論的な整備がほとんどない分野を理論化することは急務といえます。また、多表記系(スクリプト)混在での input methods、整形・組版結果の交換プロトコル等、まだ仕様自体が不安定な分野の仕様の洗練、さらには、画像・動画・音声抽象検索などのマルチメディア系での input methods とインターフェースにも、今後積極的に関与していく予定です。

4. これまでの主な成果

センター開設から 2001 年 3 月で満 4 年がたちましたが、これまでに作成済み・作成中の主な公開資産を下記に紹介いたします。<http://irc.aa.tufs.ac.jp> にアクセスされ、どうぞご覧になってみてください。

(1) 三省堂『言語学大辞典』データベース

現代言語学の最高水準を示すものとして、国際的に注目されている辞典の全文検索です。この辞典の執筆には、AA 研の所員が多数関わっています。現在はごく一部分を試験的に公開していますが、今年度中に大幅増の予定です。

(2) オスマン朝演劇ポスター

AA 研が所蔵する 19 世紀～20 世紀初頭のイスタンブルの演劇ポスターです。当時のイスタンブル演劇文化・劇場都市としてのイスタンブルの性格を物語る世界的にも他に類例を見ない見事なコレクションです。

(3) 『国語学』展望データベース

国語学会機関誌『国語学』が 2 年ごとに特集する「学界展望」のデータベースです。海外の日本語研究サイトからの参照も続いているきわめて高速な検索が実現されています。

(4) 『浅井文庫』台湾諸民族関連資料

AA 研が所蔵する故・浅井恵倫教授採録の台湾原住民の言語文化に関する貴重な動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノートなどのコレクションです。中華民国（台湾）中央研究院言語学研究所との共同研究によって、シラヤ語を含む土地契約文書などの解読が進められています。

このほかに、「タロ芋データベース」「ヒンディー語形態素解析・辞書」「言語調査票」「カイロの肖像・19 世紀」「ヒンディー語テキストコーパス」「チベット地図／人名・地名索引」など多数あります。今後も一層コンテンツを充実させていく当センターにご期待ください。

5. デジタル言語文化館

センターの研究活動の成果は、世界に向けて開かれていなければ無意味です。このため、センターは、「デジタル言語文化館」を構想しています。「デジタル言語文化館」は、当面は www(HTTP)で訪問・利用できる形で提供されますが、媒体には拘束されません。

「デジタル言語文化館」は、単なるコンテンツの羅列ではなく、その加工技術・呈示技術とその背景の理論化自体もコンテンツとなる点が特徴であり、蒐集展示と、蒐集資料・技術の工具利用の両方があこなえるところが、従来のデジタルライブラリ(電子図書館)発想を包含しつつ、それを越える点です。

6. 技術と研究の相互発展

センターは、望まれる技術の要求仕様を策定するのであって、技術自体を開発する場ではありません。望まれる技術とは、新しい技術の呈示によって技術への需要自体を呼び起こし、その結果、新たな研究工具を提供することで研究開拓のきっかけとなるような技術であり、すなわち、今は「技術的制約によって無理」と諦められ、研究分野自体が研究として認識されていないものを、明らかにするような技術を指します。

研究者の主体的発想による技術仕様の策定は、本センターのように、言語・歴史・民族・情報の各分野の専門研究者を擁し、技術と研究の相互刺戟を主眼として研究を進める専門機関によって、はじめて生れ得る成果と言えましょう。

研究活動

共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約 400 点におよぶ出版物をはじめとして多様な研究成果をあげています。

また、1996 年度からは、限られた予算のなかで、従来の研究分野を越えた斬新な共同研究を推進するため、新たに重点プロジェクトというカテゴリーが設けられました。最初の重点プロジェクトとして「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」が組織され、国際シンポジウムをおこなうなど、活発な研究活動が展開されてきました。1997 年度には、さらに「音韻に関する通言語的研究」プロジェクトが、また 2000 年度からは「アジア・アフリカにおける政治文化の動態」が組織されました。

本年度おこなわれるプロジェクトは次のとおりです。

重点共同研究プロジェクト

音韻に関する通言語的研究

(主査：梶 茂樹 / 所員 17, 共同研究員 44)

言語学の本来の研究分野は、音韻、形態、統語、意味であるが、そのなかでも音韻論は、長らく他の研究分野をリードしてきた。本研究プロジェクトは、音韻論のなかでも声調(tone)を中心とする超分節素(suprasegmentals)の研究をおこなう。

世界に、声調言語は意外と多い。中国語諸方言やチベット・ビルマ系諸語、またベトナム語、タイ語などの東南アジア諸語、バンツー系やクワ系などのニジェール・コンゴ諸語、マサイ語やナンディ語などのナイル系諸語、南部アフリカのコイ・サン諸語、またアフロ・アジア系の中でもチャディック諸語、さらにはニューカレドニア諸語やアメリカ・インディアン諸語など。また、日本語やインド・ヨーロッパ系のスウェーデン語やセルボ・クロアティア語などのピッチ・アクセント諸語の研究も重要である。

具体的な研究テーマとしては、声調、音調、アクセントなどの用語の整理と同時に、次のようなものが考えられる。

- | | |
|------------------------|----------------------|
| (1) 声調(正確にはピッチ)の音声学的特性 | (5) 声調言語とアクセント言語との違い |
| (2) 子音、母音といった分節素との関係 | (6) 世界の声調言語のタイプ |
| (3) 個々の言語における声調の体系 | (7) 声調の通時的变化と比較研究 |
| (4) 声調の語彙的、文法的機能 | (8) 声調の発生と消滅 |

池田 巧	生駒美喜	石 錩	市田泰弘	伊藤英人
岩田 礼	上田広美	上野善道	遠藤光暎	大江孝男
岡崎正男	加藤昌彦	角谷征昭	上岡弘二	木部暢子
久保智之	窪園晴夫	熊本 裕	坂本恭章	品川大輔
清水克正	清水政明	鈴木玲子	壇辻正剛	角田太作
中井幸比古	中西裕樹	中野暁雄	長尾美武	長野泰彦
新田哲夫	林 徹	早田輝洋	原口庄輔	福井 玲
堀 博文	前田 洋	松村一登	松森晶子	箕浦信勝
藪 司郎	湯川恭敏	米田信子	SMITH, Donna M Erickson	

アジア・アフリカにおける政治文化の動態 (主査: 栗原浩英 / 所員 18, 共同研究員 48)

21世紀を目前に控えた今日、地球社会は「グローバル化」を求める言説に席巻されている観がある。規制緩和と公正な市場競争によって個人の努力が正当に報われる社会を実現しようという主張である。だが現実には、競争から脱落する不幸な人々の群れが目につく一方、グローバル化の先にいかなる未来が待っているのか、明確なヴィジョンを誰も示し得ずにいる。内外を問わず、ある種の閉塞感が蔓延するゆえんである。

本プロジェクトは、このような閉塞感を打破すべく、アジア・アフリカの政治文化に焦点を当てる。アジア・アフリカはすでに19世紀から植民地化という名の、西欧的体系への規格化・標準化を経験しており、現在進行中のグローバル化に対しても適合と反発、両方の対応を見せていく。すなわち、本プロジェクトの目的は、アジア・アフリカの様々な政治文化を多角的に調査・研究することを通じて、一般に流布しているグローバル化の言説を相対化し、地球社会の文化創造のための新たなパラダイムを提示することにある。

この目的を達成するため、本プロジェクトでは6つのサブグループを設置する。「近代国家機構の形成」「ナショナリズムとインターナショナリズム」「多民族統合メカニズムの比較」「言語共同体と言語政策」「移動と越境」「国家・宗教・市民社会」)。これにより、アジア・アフリカにおける多様な政治文化の成立過程を明らかにし、国家を軸とする画一性と多様性との拮抗関係を探り、国家の枠に収まらない様々な動きや組織の現状を捉えることができると考える。

赤嶺 淳	栗屋利江	李 妍淑	井坂理穂	伊藤 真
遠藤 貢	王 柳蘭	大石高志	大林 稔	落合雄彦
粕谷 元	勝俣 誠	桐山 昇	楠瀬佳子	栗本英世
高 榮珍	小泉真理	小杉 泰	近藤光博	佐藤 章
佐原徹哉	嶋田義仁	鈴木 茂	砂野幸稔	芹澤知広
武内進一	竹沢尚一郎	竹村景子	田中雅一	津田みわ
長津一史	西村俊一	子島 進	信田敏宏	濱元聰子
林 行夫	速水洋子	稗田 乃	牧野久美子	松田素二
溝上富夫	宮本正興	村田奈々子	森 孝一	吉國恒雄
吉澤誠一郎	吉田憲司		モアペ・フェンソン・アラム	



ナバテアの墳墓群

ヨルダンのペトラを都としていたナバテア人が南下して遺した墳墓群。峡谷を穿って作られたペトラ遺跡とは異なり広大な砂漠に数多くの巨大な墓が点在する。発掘作業の都合だろうか、埋め戻された人骨が散らばっている上に、未だに墓として使われている形跡さえあり、甘い死臭が漂っている。ここを管轄するアル・ウラ市の博物館長は「第二のペトラ」にしたいと言っていたがその日は果して来るだろうか。(サウジ・アラビア王国マダイン・サーレフ。2000年2月10日。小田 淳一)

一般共同研究プロジェクト

言語文化接触に関する研究

(主査：中嶋幹起 / 所員 5, 共同研究員 23)

東アジアに共生する幾多の民族の言語は、多様性に富み、その長い歴史と相まって、多くの言語資料が集積されている。さらに、近年は、中国やロシアなどの開放政策により、文献資料や学術成果もつぎつぎに公にされつつある。

本プロジェクトは、朝鮮語、満州語、モンゴル語、エベンキ語、漢語、ウイグル語、チベット語、苗語、西夏語、白語などの言語研究者が現地調査での成果を報告し、それぞれの研究について、言語学のみならず、文化人類学、歴史学などの分野を含めた多角的かつ広域的視点から討論をおこないつつ、言語のダイナミックスを探ろうとするものである。

本年度は、目下構築中の西夏語に加えて契丹文字に関するデータベースを中心に研究を進める予定である。

池田哲郎	伊藤英人	鶴殿倫次	大江孝男	太田 斎
大瀧幸子	菅野裕臣	岸田文隆	喜多田久仁彦	坂本恭章
佐々木猛	佐藤 進	佐藤晴彦	高田時雄	津曲敏郎
丁 鋒	富平美波	西 義郎	花登正宏	樋口康一
星実千代	細谷良夫	村上嘉英		

旅と表象の比較研究（第2期）

(主査：高知尾 仁 / 所員 5, 共同研究員 9)

本プロジェクトは、他者との出会いを提示し、他者の言表と他者世界が表象するものを解釈し、他者文化の持つ多様な意味を構成する旅のディスクールを主要な対象とする。その際、他者言説を生むコンテクストや、他者の自己（自己文化）との距離・差異の構築や、他者表象が持つ価値評価などが問題となると思われる。他者が直接的に語られるという前提への疑問と、他者表象のバイアスと他者についてのディスクールそれ自体が充分に見つめられなかつことへの反省として、近年欧米で飛躍的に研究が進められている旅行記研究に対応して、ここでは、近代ヨーロッパ（ルネサンス以降）の旅のテクストとそのほかの文化の旅のテクストを取り上げるとともに、他者についての多種多様な表象形態や、それに関連した諸理念（例えば、秩序、正義、正統、コスモス）の表象化についても研究の対象とする。従って、この研究では、旅論・表象論・他者論とそれらの交差する領域が取り扱われることとなる。このような比較研究によって、エクリチュールを有する文化による、他者と他者のいる場所と時間の配置・配列が明らかにされ、またその文化と他者との関係性（例えば、理想、調和、幻想、混乱、絶望、排除）を提示するディスクールが明らかにされるものと期待される。またさらには、他者に対比された自己（自己文化）のアイデンティティの提示の実体や、文化の普遍性や近代というディスクールについても考察されることが期待される。

第1期の研究に継続して、第2期では、「旅の研究」を「人文主義・人文科学における現地(field)主義の系譜学の研究」へと展開し、「他者表象の研究」を「世界表象のモーメントとしての両（東西）インド表象の研究」へと展開する予定である。

浅井雅志	荒木正純	彌永信美	重松伸司	田中純男
難波美和子	西尾哲夫	原 肇彦	渡辺公三	

東アジアの社会変容と国際環境

(主査：中見立夫 / 所員 3, 共同研究員 30)

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに、現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。

また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地域における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に連関していたかという問題を中心にして、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。

毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。

赤嶺 守	石濱裕美子	井上 治	井村哲郎	江夏由樹
岡 洋樹	岡本隆司	尾形洋一	小野和子	笠原十九司
加藤直人	岸本美緒	楠木賢道	新免 康	菅原 純
坪井善明	寺山恭輔	中村 義	西村成雄	萩原 守
浜下武志	原 晖之	藤井昇三	細谷良夫	松重充浩
毛里和子	森川哲雄	森山茂徳	柳澤 明	吉澤誠一郎

西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究

(主査：クリスチャン・ダニエルス / 所員 5, 共同研究員 16)

現在の西南中国は、もともと非漢族の居住地域であり、中国歴代王朝の支配下に少しづつ組み込まれていく歴史をもつ地域である。元明清を通じて、漢民族移民の増大と歴代王朝の統治政策によって、多くの非漢族が中央政府に直接支配されるようになり、そのことによって民族移動が激しくなり、非漢族の土着社会に大きな変容がおこり、東南アジア大陸部へ移住する非漢族も出現した。だが、従来この歴史過程を総合的に分析する研究は僅少であった。

本プロジェクトの目的は、(1)西南中国非漢族の歴史に関する研究発表、(2)史(資)料の発掘・収集・整理をおこなうことによって、従来注目されることのなかったこの地域の歴史に対する研究を促進することにある。なお、方法論として非漢族を主体とした分析視点を重視すると同時に、歴史学者以外に文化人類学、民族学、民俗学、言語学などの専門家の参加によって学際的なアプローチの構築をめざす。

なお、本研究所の「歴史・民族叢書」では、『雲南少数民族伝統生産工具図録』、『四川の考古と民俗』及び『西南中国伝統生産工具図録』を刊行している。

井上 徹	上田 信	上西泰之	菊池秀明	岸本美緒
未成道男	武内房司	多田狷介	谷口房男	張士陽
塚田誠之	寺田浩明	林謙一郎	吉野 晃	渡辺佳成
渡部 武				

歴史的イラン世界に関する研究

(主査：家島彦一 / 所員 3, 共同研究員 14)

この共同研究プロジェクトは歴史的イラン、すなわちイラン高原のみならず、中央アジアをも含む<大イラン(the greater Iran)>という枠組みの中で、<イラン的要素>とは何かについて、言語・歴史・文化・思想・社会など多方面から考察し、歴史的イラン世界の全体像を描出することを目的としている。

平成 10 年度に発足以来、3 年にわたって計 11 名の研究者による事例研究報告・討論を重ねてきたが、この世界の歴史の古さ、地理的広大さ、文化的多様性も与って、未だ初期の目的を達するに至っていない。したがって、本年度（最終年度）はこれまでの研究の継続と併せて、隣接文化圏とりわけインド、トルコ、アラブ文化圏との比較・対照を行うことによってイラン文化の特質を浮かび上がらせたい。

なお、当研究プロジェクトの目的、当初計画の詳細は、2000 年版『アジア・アフリカ言語文化研究所要覧』を参照いただきたい。

今澤浩二

近藤信彰

繩田鉄男

小名康之

坂本 勉

間野英二

上岡弘二

清水和裕

山口昭彦

川瀬豊子

清水宏祐

吉田 豊

北川誠一

寺島憲治

独立後アフリカ諸国における国家と宗教 (主査：小川 了 / 所員 4, 共同研究員 14)

本プロジェクトにおいては、独立後のアフリカ諸国、特に現代において国家と宗教がどのように協調、相克しているのかを記述、分析し、アフリカ各国の将来を展望することを主眼とする。

アフリカ諸国において、伝統宗教、イスラム教、キリスト教は人々の糾合にどのような役割を果たしてきたのか、あるいは果たしていないのか。それらの宗教は新生国家において国民統合に役割を果たしたのか、あるいは国家機構の横暴を牽制する役割に終始しているのか。ひとつの国家のなかでイスラム教徒、キリスト教徒など異なった宗教信奉者が対立することで、国民統合に宗教が阻害要因になっていることはないか。国家の内実が問われ、民主化の実現が急務になっている現在、諸宗教にはどのような機能を果たすことが要請されているのだろうか。原理的に言えば、本来、国家のめざすところと、宗教のめざすところとは相矛盾するものである。でありながら、ヨーロッパ諸国、そして日本においても国家と宗教は相互に依存しあうことが歴史的に多かった。アフリカ諸国の国家と宗教の現状を検討し、将来的な動きをも予測する研究をおこないたい。

なお、2001 年度は成果のとりまとめのための実務的な作業年とする。

遠藤 貢

小馬 徹

津田みわ

大林 稔

佐藤 章

戸田真紀子

落合雄彦

嶋田義仁

松田素二

勝俣 誠

武内進一

吉田憲司

栗本英世

竹沢尚一郎

イスラーム圏における国際関係の歴史的展開 - オスマン帝国を中心に -

(主査：黒木英充 / 所員 4, 共同研究員 19)

本プロジェクトは、イスラーム圏において国際関係がいかに形成され、認識され、発展してきたかを、総合的に研究することを目的としている。その出発点として、600年以上にわたって中東地域の中核部で発展し、また文書資料による情報を豊富に蓄積してきたオスマン帝国を対象に選び、(1)その対西方すなわち地中海・西欧地域に向けて、(2)対北方すなわちロシアに向けて、そして、(3)対東方の中央アジアとイラン、インド洋地域に向けて、そしてさらに可能であれば、(4)対南方のアフリカ内陸地域に向けての、それぞれの国際関係の実態を、時代的な発展過程に留意しながら多角的に論ずる場をつくりだしたい。ここでいう国際関係とは、国家間の外交関係のみならず、その基層をなした人間たちの交流の具体相もふくむ広義のものである。従って、国際条約とイスラーム法の関係、戦争と安全保障、外交団の構成と活動、通訳、貿易と関税、巡礼といったさまざまな問題が設定される。これらの課題を、古代西アジア世界もふくめた長期的展望のなかで位置づけ、同時に現代世界の国際関係、とりわけ中東地域をめぐる国際政治に対しても新しい有効な視座を提供できるように検討してゆくものである。

江川ひかり	奥田 敦	小山田紀子	上岡弘二	川口琢司
小松香織	佐藤幸男	佐原徹哉	新谷英治	高松洋一
永田雄三	羽田 正	深澤克己	堀井 優	堀川 徹
松井真子	三沢伸生	宮崎和夫	山口昭彦	

アル=アフガーニーとイスラームの「近代」(主査：飯塚正人 / 所員 2, 共同研究員 20)

イラン生まれのジャマール・アッディーン・アル=アフガーニー（1897年没）は、生涯にアフガニスタン、インド、エジプト、トルコといったイスラーム圏の各地とヨーロッパ諸国を訪れ、19世紀後半以降のイスラーム世界の歴史に大きな思想的影響を与えた革命家である。彼は伝統的イスラーム思想の改革や専制政治の打破など、ムスリム社会内部における変革の必要を唱える一方、各地でヨーロッパの侵出に対するムスリムの団結（パン＝イスラミズム）を説いて回った。エジプトのオラービー運動、イランのタバコ・ボイコット運動など、19世紀末に各地で起きた「民族」運動も、彼の存在を抜きにして語ることはできないし、現在イスラーム世界が直面している思想的課題のほとんどはアル=アフガーニーのもとですでに予感されていたといつても過言ではない。

本プロジェクトは、没後100年を迎えたこの偉大な革命家の思想や足跡、各地における評価などを総合的に分析することによって、最終的にはイスラーム世界における「近代」の意味まで問い合わせることをめざす。また、上記目的をより効果的に達成するため、文部省科学研究費創成的基礎研究『現代イスラーム世界の動態的研究』の1-a班「現代イスラームの思想と運動」と緊密に連携しつつ研究を進めいく予定である。

新井政美	池内 恵	大石高志	大塚和夫	帶谷知可
加賀谷寛	柏谷 元	栗田禎子	小杉 泰	小松久男
酒井啓子	富田健次	中田 考	中西久枝	中村 覚
八尾師誠	松永泰行	松本 弘	三木 亘	吉村慎太郎

活字字体史研究

(主査：芝野耕司 / 所員 2, 共同研究員 9)

目的：18世紀に始まった近代活版印刷で用いられてきた漢字字体の変遷を分析することによって、次の点を明らかにする事をめざす。

- (1)いわゆる康熙字典体
- (2)慣用字体
- (3)明朝体の基本設計

また、この研究を通じて、新JISコードの代表的字体の決定に学問的根拠を与えるとともに、国語審議会での問題となっている漢字字体問題の学問的根拠にも寄与することをめざす。

研究方法：康熙字典及び18世紀以降の活字総数見本帖を収集し、一字毎に字体対照データベースを作成し、このデータベースの検討を通じて、上記の研究目的を達成する。

成果物：研究成果物は、新JIS漢字コードの代表字体に活かすとともに、JIS X 0208の将来の改正で用いることのできる代表字体の決定の基礎資料とする。個別字体検討資料は、各社での字体設計の基礎資料として用いることができる資料の作成をめざす。また、国語審議会で検討されている表外字の字体検討に対しても、学問的基礎を与えることをめざす。

最終的な報告は、単行本として刊行することも予定する。

池田証壽
鈴木広光

石塚晴通
直井 靖

小池和夫
比留間直和

小駒勝美
府川充男

境田稔信

インド洋海域世界に関する発展的研究

(主査：深澤秀夫 / 所員 4, 共同研究員 14)

紀元前数世紀に現れ8世紀から確固たるものとなり、インド亜大陸を挟んで東アフリカからアラビア地域と東南アジア地域とを結ぶ交易や移住や巡礼による人と物との移動が生み出した文化・社会的に多元的でありかつ歴史的に重層的なネットワークこそが、インド洋海域世界である。この海域世界は、16世紀以降のヨーロッパ世界のインド洋への進出とそれに伴う近代世界システムの確立によって破壊されるどころか、それがもたらした植民地化や奴隸制や契約移民制は新たな人々の出会いを促進し流動性を高めまた居住地域を拡大した結果、その多元性と重層性をより一層複雑化させると共に動態的な性格を加速することとなった。それゆえ、インド洋においては、プローデルの『地中海』やA.リードの『交易時代の東南アジア』に示された包括的かつ微視的な歴史学の視点がとりわけ有効性を持つものである。

本プロジェクトにおいては、個別文化・社会の研究の成果をインド洋海域世界の歴史的成立とその展開の通事的研究に導き入れることおよびその通事的視点を共時的な個別文化・社会研究に導き入れることにより相互の研究を深化させることの可能性を、歴史学・言語学・人類学はもとより考古学・技術史・栽培植物学などの学際的視点から討議を重ねてゆくことを目標として指定している。さらに、多元的かつ重層的に形成・展開されてきたインド洋海域世界についての考察は、局所的な地域研究に寄与するのみならずグローバル化する現代世界の中における多元・多文化的な人の在り方に対し具体的なモデルを提示することあるいは国民国家・領域国家とは異なる組織のモデルを提示することをも招来するものである。

本プロジェクトの成果は、フィールドワークに基づいたインド洋海域世界の個別文化・社会についての記述的なモノグラフおよびインド洋海域世界像に迫る論考集あるいは画像集として公開してゆく予定である。

秋道智彌
崎山 理
花渕馨也

飯田 卓
杉本星子
堀内 孝

飯田優美
高桑史子
松浦 章

門田 修
田中耕司
森山 工

川床睦夫
富永智津子

アジア・アフリカにおけるジェンダーとセクシュアリティ

(主査：内堀基光 / 所員 5, 共同研究員 10)

人類社会における性と性差の問題へのアプローチに関しては、ジェンダーとセクシュアリティという2つの用語で代表される関心のあり方の差異がある。この共同研究では、広くアジアとアフリカの諸社会を見渡しつつ、ジェンダーとセクシュアリティの社会的編制や性的イメージの構成について、国家および地域的・家内的経済といったマクロな規制とミクロな対面行動の架け橋あるいはバトルフィールドとなる議論を展開し、これまでの人類学的研究から歩を進める。

足羽與志子
田辺明生

河合香吏
沼崎一郎

栗田博之
速水洋子

小泉順子
松園萬亜雄

菅原和孝
牟田和恵

社会空間と変容する宗教

(主査：西井涼子 / 所員 8, 共同研究員 10)

人類学においては個人対社会、主観対客觀といった二項対立的な問題設定を前提としていることが多い。この共同研究プロジェクトは、こうした前提を超えて、いかに人々の経験のリアリティを捉えることができるのかについての、人類学的な理論的展望をひらくことを目的とする。ここでいう社会空間とは、主体の実践のスペース、もしくは実践において他者と相互作用しつつ構築する社会関係の総体をさす。そこにおいては、実践主体はいかに重層する諸関係とかかわりながら自己を維持し構成するのかが問題となる。そこからあらためて、社会的なるものが問われることになろう。このような社会科学の中心的ともいえる課題を追求するために、研究会は人類学者を中心としながらも、心理学、社会思想等の隣接分野の研究者の参加をあおぎ、学際的な共同作業による理論の構築をめざす。

本プロジェクトでは、こうした課題を追求するにあたり、宗教といった現象に焦点をあわせることで、個々のメンバーの事例報告の羅列に終わることを避け、より議論を建設的に深めようとする意図をもつている。高度経済成長に伴う大衆消費社会の出現、情報社会化、国際化のなかで、人々は宗教的な実践を多様化、差異化させている。このような宗教、あるいは宗教的なものの経験をとおして、再編成されていく社会関係のあり方を考察することは、社会空間の概念を歴史的文脈において検討することを可能にするものと思われる。

今村仁司
田村愛理

高木光太郎
土佐桂子

高崎 恵
當眞千賀子

田中雅一
平井京之介

田邊繁治
箭内 匠

ポンサリー県の言語文化学的研究

(主査：新谷忠彦 / 所員 2, 共同研究員 2)

ポンサリー県はラオスのなかでも最も民族・文化が複雑に入り組んだ地域であり、同時に、最も開発の遅れている地域である。従って、伝統文化は比較的よく保存されており、我々の複合民族文化交流圏の研究にとっては理想的なフィールドを提供してくれている。本プロジェクトでは、この地域の言語及び物質文化を取り上げ、この県における複合文化交流メカニズムの全体像を明らかにせんとするものである。

加藤高志

園江 満

海外学術調査・フィールドワークの手法に関する総合調査研究

(主査：石井 淳 / 所員 7, 共同研究員 12)

(1) フィールド科学の構築と展開の基礎的研究

学問諸分野のそれぞれにおいて海外学術調査を推進している研究組織の情報を収集し,多分野にわたるフィールド調査の手法と成果を総合し,現地研究に立脚した統合的な「隣地の地」としてのフィールド科学を確立する。

(2) 情報交換の推進によるフィールド科学の推進

海外学術調査の多面的展開をうながす総合的連絡・調整,国内の研究諸機関を有機的につなぐネットワークの開発,研究者相互の共同・連携の活性化,調査情報の集積・管理・公開・利用のシステム開発を推進しつつ,フィールド科学の確立をめざす。

市川光雄

伊藤元己

岩坂泰信

木村秀雄

栗本英世

佐藤洋一郎

諏訪正明

田島和雄

立本成文

長野泰彦

山本理人

渡辺興亞

日本占領期ビルマ(1942-45)に関する総合的歴史研究

(主査：根本 敬 / 所員 2, 共同研究員 7)

本プロジェクトは,日本占領期のビルマ(1942-45年)に関する歴史を,政治・経済・軍事・農業・文化・民衆動向・少数民族・従軍慰安婦の諸角度から実証的な検証を加え,総合的に理解することを目的としている。その際,占領されたビルマ側に重点を置きつつ,占領した日本側の意図と占領政策の実態についても充分に注目するつもりである。

競争的研究経費の獲得と連動させることを前提に,国内およびビルマ・英国での聞き取り調査の実施,文献資料の在り処の確認と調査・整理,研究会を通じての相互の情報交換,最終年度(3年度目)における国内シンポジウムの開催などを予定している。プロジェクト終了後には成果刊行物として,資料集と論文集をそれぞれ発行する計画である。

池田一人

伊野憲治

岩城高広

高橋昭雄

武島良成

南田みどり

森川万智子

修辞学の情報学的再考

(主査：小田淳一 / 所員 6, 共同研究員 10)

古典修辞学の諸部門の中で19世紀まで存続したのは「表現法(elocutio)」のみであるが,20世紀半ばから始まった修辞学の復権は表現法を,テクストを構成する諸要素間におけるコード変換の技法として,実体的な要素単位に対して直接作用する操作であると見なすに至っている。本プロジェクトは言語表現,音楽表現,映像表現,身体表現等の媒体を超えたテクストの作り手,またそれらの表現を様々な手法で分析している研究者を共同研究員及び研究協力者に加え,芸術の美的価値のある構造の関数として記述するという,一元的な芸術=形式論に基づく「形式的構造の研究」としての一般修辞学を情報学的に考察することによって,様々な形式を持つ言語文化情報に遍在する修辞学的技法のレパートリーを明らかにすることを目的とする。

青柳悦子

石井 満

宇佐美隆憲

小方 孝

往住彰文

永野光浩

西尾哲夫

堀内正樹

松本みどり

水野信男

間大西洋アフリカ系諸社会における 20 世紀<個体形成>の比較研究

(主査：真島一郎 / 所員 4 , 共同研究員 25)

21 世紀転換期の人文社会系諸学でこれまでに発現をみてきたさまざまな思潮の底流にあるのは、西欧近代の市民原理に裏打ちされ相互に交錯しつつ成立した三様のレヴェルにおける歴史主体 - <国家><民族><個人> - のありようを複数の視角から根本的に問い合わせながらおしていく、主体の問い合わせなおし作業にほかならなかった。

本プロジェクトがめざすのは、このうち国家や民族の“揺らぎ”とは対照的に主体としての権利づけが複数性のうちでつねに代補・更新されながら、非西洋世界における記憶、声、身体、ジェンダー、あるいはクレオール、ディアスボラ、サバルタン、マノリティ、市民（市民社会、世界市民…）といった数々の言説空間の内で中核を占めてきた第三の主体概念<個人>の位置づけについて、20世紀・間大西洋アフリカ系諸社会における特定の個々人の生の深みにまでさかのぼった具体的な場からこれを問い合わせ、比較検討していく作業である。アフリカ大陸・島嶼部の諸社会、カリブ・中南米のアフロ系諸社会、およびアメリカ合衆国のアフリカ系コミュニティを対象とする人類学、歴史学、政治学、文学など多分野の研究者から構成された共同研究によりその際とくに焦点があてられるのは、自己による自己の生を通じた表象形成と、他者による他者の情報を介した表象形成との交叉点で成立する、<個体化 = 個体形成 individualization> の歴史・文化的動態となるだろう。

阿部小涼
大森一輝
佐々木孝弘
竹中興慈
樋口映美

荒井芳廣
落合雄彦
柴田佳子
中條 献
星埜守之

岩田晋典
工藤多香子
鈴木 茂
津田みわ
松田素二

遠藤 貢
栗本英世
鈴木慎一郎
中林伸浩
矢澤達宏

大辻千恵子
崎山政毅
武内進一
浜 邦彦
渡辺公三



ビルマ料理店のメニュー(左)と料理(下)

メニューは、蝦・鶏・家鴨・豚・牛・サンバー(鹿の一種)・魚・野菜の順に料理を記している。料理は、前列右からオウンタミン(ニコナツミルク炊きのご飯)、ページーナッ(フジマメのやわらか煮)後列右からウェッタニージェッ(豚肉の赤煮)、チンイエーピン(醤味のスープ)。

(ヤンゴン市カマーユッ区、ダヌビュー=ドーソーイー料理店フレーダン店にて、1997年12月26日、澤田英夫撮影)



所外からの代表による共同研究プロジェクト

浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究 (主査：土田 滋 / 所員 4, 共同研究員 8)

アジア・アフリカ言語文化研究所には、1970 年に浅井惠倫博士の所蔵していた書籍を中心として、浅井文庫が設置された。しかし、既に公開された書籍の他に、台湾原住民に関する貴重な一次資料（フィールドノート、語彙集等、写真などのアルバムやフィルム、原稿、書簡、単語カード、音声資料、8ミリフィルム、未発表の高砂族伝説集検索カード、浅井の大先輩でもある小川尚義の講義ノート等）があり、そのほとんどは未整理・未公開である。これらの中には、戦災で現物が消失した『スピリチュアル修行』のマニラ本のフィルムや台湾の平埔族関係の清代に作られた土地契約文書の原本なども含まれており、これらは、現在では既に手に入れることがほとんど不可能である。また、台湾の原住民のうち、平埔族については、既に平埔族自体が漢化してしまっており、独自の言語、文化のほとんどを失っている。このような事実から考えれば、浅井博士の残した資料は大変重要な資料であるということが出来、早急に分類・整理を行って公開することが必要と考えられる。

このような状況に鑑み、本プロジェクトは以下の 2 点を主な目的とする。1 つめは、浅井博士及び小川尚義博士の残した一次資料の整理・分類を行い、この方面的研究者の研究の利便を図るために、電子媒体を中心として公開していくことである。本資料に関しては、台湾の研究者からも関心を寄せられており、その学術的な価値は非常に高い。第 2 には、両博士の資料を通して、戦前の日本人による言語学・民族学の調査活動が主に学術的な面において果たした役割などについての検討を行うことである。これまで、鳥居龍蔵、伊能嘉矩等一部の学者については、いくつかの一次資料が整理されて公開されているが、当時の植民地政策の中での、日本人による言語学あるいは民族学的な調査活動のコンセプトや実態などについては、まだまだ研究が進んでいるとは言い難い。本プロジェクトは、浅井博士の資料の整理・分類を通して、日本植民地時代の台湾の民族学・言語学の調査活動についての一側面を明らかにすることができると考えられる。

笠原政治
宮岡真央子 清水 純
森口恒一 末成道男
吉澤誠一郎 谷 智子
 中西裕二

前近代東南アジアの「古典的物語」と歴史認識

(主査：青山 亨 / 所員 1, 共同研究員 8)

2000 年度第 1 回研究会で、本プロジェクトの検討課題を以下の 3 点に整理した。

- 対象とされる古典的物語のテクストの「語り」を分析するだけでなく、より高次の次元でその「語り」を規定し、テクストを了解可能にする「語り」 - メタナラティブ、もしくはマスター・ナラティブを検討する。
- テクストにアプローチする研究者の思考を規定する近代歴史学のメタナラティブを問題にする。
- 近代歴史学のメタナラティブを下敷きにした私たちの歴史叙述そのものありようを問題にする。

そこで、第 2 年度の前半の研究会では、上述の歴史認識・分析方法にかかる問題に取り組み、後半の研究会では研究員各自の個別研究テーマの報告・検討に移る予定である。

飯島明子
小林寧子 伊東利勝
土佐桂子 桃木厚子
原田正美 片山須美子
 小泉順子

その他のプロジェクト

言語研修

(主査：峰岸真琴 / 所員 6, 共同研究員 5)

言語研修委員会は、その分野に精通する研究者によって構成され、アジア・アフリカの言語に習熟し、実際的に役立つ能力を高める最も効果的な方法を検討することを目指している。

短期集中言語研修の目標は、

- (1) 口語および書き言葉の能力をつける
- (2) 言語の科学的研究と実際的応用の訓練の提供
- (3) 大学院相当の学生に野外調査を実施するための手段としての言語習得の援助

専門委員会が年2回、専門委員・共同研究員合同会議が年1回開催され、研修言語の選定、教授法、開催時期・期間、実施方法、評価等について討論する。

長田俊樹

長野泰彦

繩田鉄男

森安孝夫

吉川武時

言語研修(サブプロジェクト多言語 CALL システム検討会)

(主査：芝野耕司 / 所員 2, 共同研究員 17)

言語教育を刷新し、コンピュータ及びインターネットを利用した言語教育の方法論及び技術論的検討を行うとともに、IBM をはじめとする企業との共同研究を視野に入れた研究開発を行う。

また、単一言語に閉じたシステムではなく、多言語対応が可能なシステムパラダイムの検討を行う。

成果は、今後の研究所での言語研修での利用を筆頭に、東京外国语大学で利用できる CALL システムの検討を行い、2000 年度から概算要求を行っているコンピュータ支援言語教育研究センター(CALL センター)の設置に向けての予備検討を行う。研究成果は、アジア・アフリカ言語文化研究所での言語研究とともに、東京外国语大学情報処理センター及び CALL センターで活用することを目的とする。

藤村知子

小川英文

富盛伸夫

益子幸江

田畠義之

川上茂信

成田 節

林 俊成

山内 豊

佐野 洋

根岸雅史

鮎澤孝子

在間 進

野間秀樹

上田広美

鈴木美加

林佳世子



カラ・カーシュのダスタンチ

シャー・メメット翁（自称85歳）は新疆の高名なダスタンチ（叙事詩の弾き語り）であり、翁の十八番「アブドゥラフマン・ハン」は19世紀のホタン叛乱を題材としたもので歴史学的にも興味深い内容を含んでいる。ドタール（二弦の弦楽器）を奏でながら朗々と謳われるダスタンは謳い通すのに長時間を要し、「ああ、我が子よ！ Ah! Balam」というリフレインでクライマックスに達する。

（中国、新疆ウイグル自治区ホタン地区カラ・カーシュ県、2000年9月7日、菅原純撮影）

国際学術交流

外国人研究者の招へい

本研究所は、国際的な学術交流・共同研究を推進するために、外国からアジア・アフリカの言語文化の専門家を外国人研究者として受け入れ、研究の便宜を供与しています。比較言語文化論研究部門ならびに言語文化情報研究部門の情報開発分野は、外国人研究者を客員として受け入れるためのポストです。このほか日本学術振興会や国際交流基金の招へい計画などで来日する外国人研究者を、随時受け入れています。この4年間に外国から受け入れた研究者は以下のとおりです。

(*はCOE外国人研究員、　は客員以外の研究員)

1998	* Apolonia Tamata 片山素子 阿孜古麗古力 沈 靖子 Nasiri Mohammad-Reza 史 金波 索 文清 Prakya Sree Saila Subrahmanyam Lawrence Andrew Reid	フィジー 日本 中国 日本 イラン 中国 中国 インド アメリカ合衆国	言語学 言語学、音韻論 言語学、言語教育 歴史学 歴史学 言語学、西夏学 民族歴史学 言語学 言語学
1999	Kenneth William Cook John Gongwe Kiango * Didier Louis Nadia Goyvaerts Traoré Mory 清格爾泰 Stanley Herman Starosta Peter Edwin Hook Tej Krishan Bhatia Andrew R. Hall Bolombo Isalokembya	アメリカ合衆国 タンザニア ベルギー コートジボワール 中国 アメリカ合衆国 アメリカ合衆国 アメリカ合衆国 アメリカ合衆国 コンゴ	認知及び応用言語学 語彙学、辞書編纂学 言語学 実践演劇論、芸術社会学 言語学（契丹語研究） 言語学 印欧言語学、言語類型学 言語学 東アジア史 社会心理学
2000	* Ernst Frederick Kotzé Diouf Jean Léopold Ileto Reynaldo Clemeña Subbarao Karumuri Venkata Zhukova Alevtina Nikodimovna Breen James William Chawla Ashok Kumar	南アフリカ セネガル フィリピン インド ロシア オーストラリア インド	アフリカーンス語 ウォロフ語 東南アジア史 言語学 チュクチ語 計算機辞書学 言語学
2001	* Kansakar Tej Ratna	ネパール	言語学

外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近はさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実を図ろうとしています。これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下のとおりです。

(外国機関名(略号) / 締結年 / 国名)

国立科学技術研究機構(ONAREST)
(現・高等教育・情報科学・科学研究省
(MESIRES))
1978. カメルーン

文部科学省科学研究費補助金による現地調査
「アフリカ部族社会の比較調査」(1969-76)におけるカメリーンとの共同研究を経て、カメリーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所所長を招へい、本研究所で協定締結(1978)。所員の現地における共同研究(1980-81, 82, 84, 86) : カメリーン研究者の現地調査参加(1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91) : 本研究所におけるカメリーン研究者の成果刊行、単行本8冊(African Languages and Ethnographyシリーズ), 論文1点(Sudan Sahel Studies所収)。

おこなっているが、その一部の KWIC 索引は、*Choix de Documents Tibétains à la Bibliothèque Nationale III Corpus Syllabique*として、フランス国立図書館から1990年に出版された。

人文科学研究所(ISH) 1988. マリ

文部科学省科学研究費補助金による現地調査
「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し、その成果を *Boucle du Niger: Approches multidisciplinaires*, Vol.1.(1988), Vol.2.(1990), Vol.3.(1992)として刊行した。

農業計画・経済研究センター(CAPES)

1996. イラン

国際学術研究「イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究」の実施を契機に、将来幅広くイラン文化と日本文化に関する共同研究プロジェクトを組織する目的で研究協力協定が締結された。両研究機関の共同研究員に、研究員と同等の便宜と援助をおこなうことになっている。

インド諸語中央研究所(CIIL) 1987. インド

CIIL 所長本研究所訪問(1983), 副所長来訪(1985), 所員来所, 共同研究(1984-85, 1991-92) : 本研究所所員 CIIL 訪問(1982, 87, 88, 89, 91, 92) : 共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施, 共同研究年次報告書発行(1990, 91, 92)。

情報文化省文化研究所(IRC) 1997. ラオス

「シャン文化圏」プロジェクトを円滑に進めるため、ラオスとの共同研究を目的として学術協力協定が締結された。

インド統計研究所(ISI) 1987. インド

ISI 特別客員研究員本研究所来所, 共同研究(1985-86), 経済研究部長来訪(1988) : 本研究所所員 ISI 訪問(1987, 88, 89, 90, 91) : 共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中(1987-) : 電算資料シリーズ3冊発行(1987, 88, 90)。

インドネシア科学院社会文化研究センター(PMB-LIPI) 2000. インドネシア

国際学術研究「ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究」プロジェクトを円滑に進めるため、インドネシアとの共同研究を目的として学術協力協定が締結された。

チベット言語文化研究所(LCAT)

1988. フランス

敦煌の古代チベット語文献のデータベース化を

海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行うことを重要な研究課題のひとつにしています。過去5年間に、文部科学省科学研究費補助金（国際学術研究・海外学術調査=平成11年度から海外学術調査）で、本研究所員が組織した研究は以下のとおりです。

- 1) シャン文化圏における言語学的・文化人類学的調査(1996-98, 新谷忠彦)
- 2) 南インド・タミル地域の社会経済変化に関する歴史的研究(1997, 水島司)
- 3) インド諸言語のための機械可読辞書とパーザの開発(1997-98, ペーリ・バースカララー)
- 4) イスラム圏における交通システムの歴史的変容に関する総合的研究(1998-2000, 家島彦一)
- 5) 東南アジア島嶼部における国際移動に関する文化人類学的研究(1998-2000, 宮崎恒二)
- 6) 東アジア沿海地域における民俗文化再生過程の人類学的研究(1998-2000, 三尾裕子)
- 7) 北部中央バントゥ諸語の記述・比較研究(1999-2001, 加賀谷良平)
- 8) アジアの文字と出版・印刷文化及びその歴史に関する調査研究(1999-2000, 町田和彦)
- 9) 中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究(1999, 新免康)
- 10) マダガスカルにおける民族集団の生成論理と民族間関係(1999, 内堀基光)
- 11) サラワク先住諸民族社会における自然環境認識の比較研究(2000-01, 内堀基光)
- 12) 南アジア諸言語に関する基礎語彙・文法調査(2000-01, ペーリ・バースカララー)
- 13) ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究(2001, 宮崎恒二)

なお、このほか各種財団の助成金による海外学術調査も組織されています。「海上ルートを通じての東西の文化的・経済的交流 - インド洋周辺の港市遺跡の調査 -」(研究代表者・家島彦一, 1984-85), 「フィリピン・フォークカトリシズムの歴史人類学的研究」(研究代表者・池端雪浦, 1984-87)などがその一部です。

「海外学術調査・フィールドワークの手法に関する総合調査研究」 (通称「総括班」)の活動

科学研究費補助金（以下「科研費」という）を受けている「総括班」は、本研究所石井溥教授を代表者とし、他のさまざまな機関に所属する研究者によって組織され、本研究所に事務局をおいて、科研費にかかる研究者・研究組織相互間、および研究者側と日本学術振興会の間の情報交換、連絡調整などの活動を行っています。

活動の主なものとしては、科研費で海外に派遣される研究組織の代表者を集めて情報交換を行う「研究連絡会」の開催や国際情勢に即応した研究調査を可能にするための「学術研究体制調査のための海外派遣」および『海外学術調査ニュースレター』の広報があります。

長期研究者派遣

アジア・アフリカの言語文化の研究にとって、各地域で話されているさまざまな言語の習得が必須であることは言うまでもありません。本研究所では助手等の若い研究者をそれぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に派遣しています。この現地投入は、言語を自由に話し、あるいは読み、書く能力を獲得するだけでなく、長期間現地の生活にとけこむことによって、その地域の文化や歴史の研究に対する幅広い視点を身につけることを目的としています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計36名が派遣されました。

1967-69	石垣幸雄(エチオピア), 守野庸雄(タンザニア)
1969-71	松下周二(ナイジェリア), 家島彦一(アラブ連合)
1971-73	内藤伸雄(インド), 中野鶴雄(モロッコ, 南イエメン)
1973-75	福井勝義(ソマリア), 中嶋幹起(香港)
1975-77	加賀谷良平(ボツワナ), 湯川恭敏(タンザニア, ザイール)
1977-79	石井 淳(ネパール), 藤 司郎(ビルマ)
1979-81	羽田亨一(イラン, トルコ), 清水宏祐(アラブ連合, イラン, トルコ)
1981-83	山本勇次(ネパール), 新谷忠彦(ニューカレドニア)
1983-85	辻 伸久(中国, 香港), 水島 司(インド)
1985-87	中見立夫(中国, モンゴル), 梶 茂樹(ザイール, ケニア, ザンビア)
1987-89	松村一登(フィンランド, ソ連), 宮崎恒二(オランダ, インドネシア)
1989-91	林 徹(中国, トルコ), 栗本英世(エチオピア, ケニア)
1991-93	栗原告英(ベトナム, ロシア), 峰岸真琴(インド)
1993-95	新免 康(中国, 独立国家共同体, イギリス), 根本 敬(イギリス, タイ)
1995-97	飯塚正人(エジプト, イギリス), 黒木英充(シリア, フランス)
1997-99	吉澤誠一郎(フランス, イギリス, 中国, 台湾), 西井涼子(タイ, イギリス)
1999-2001	澤田英夫(オーストラリア, インド), 本田 洋(韓国, イギリス)
2001-2003	床呂有哉(スペイン, オランダ), 呉人徳司(アメリカ, ロシア)



南原の邑内地区（旧市街地）にある二つの建物

この二つの建物の共通点はなにか？かたや純朝鮮風の廟，かたや日本風の切妻造の二階建てであるが，いずれも日本による植民地支配期に建てられたものである。右はパンソリ『春香歌』の主人公を祀る祠堂で1931年に創建された。妓生たちが年一回ここで行っていた祭祀は，今日南原女子高等学校の生徒たちによって受け継がれ，一大郷土祝祭，春香祭の始まりを告げる行事となっている。一方，左は1930年代に街路整備の進んだかつての目抜き通り（当時は「本町通」と呼ばれていた）にある，日本人雑貨商清水の旧店舗である。解放後は官に接收され，一時期は右派政治団体である大韓青年団によって使われていたが，今日では一階が食堂，健康食品店，軽食屋，洋品店に，二階の一部が茶房になっている。郷土史作りという運動によって，一方は主役を与えられながらも微妙に意味づけを変え，他方は顧みられることはなかったが朽ち果てずに今を生きている。（韓国全羅北道南原市，右は1999年10月，左は2000年2月，本田洋撮影）

短期共同研究員（公募）

1978 年度より、共同研究プロジェクトとは別に、本研究所において一定期間（1 週間以上 3 ル月以内）研究をおこなう共同研究員を公募しています。

大学院地域文化研究科博士後期課程

東京外国语大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を 1992(平成 4)年度より設置しました。本研究所では教育体制のこうした発展に協力すべく、本研究所に大学院委員会を設置し、22 名（2001 年度）の教官が参加し、言語学・民族学・文化人類学・歴史学などの分野における学生を受け入れ、教育活動に従事することとなりました。

研究生

大学卒業かそれと同等以上の学力がある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、審査の上、研究生として入所を許可します。

研究生は入所料及び研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。



ヘイトカ・ジャーミーの
エントランス

カシュガルの中心部に位置するヘイトカ・ジャーミーは 16 世紀の建立いらい当地域の教学の中心として重要な役割を果たしてきた。「ヘイトカ」とは Id Gah(祭礼広場)の訛で、この地で盛大に執り行われるイスラム 2 大祭に由来したものか。現存する建物は 1870 年代に修建されたもので、当時この地を支配したヤーコープ・ベゲ政権(1865-1878)の権勢を今に伝えている。

(中国、新疆ウイグル自治区カシュガル市 2000 年 8 月 31 日、菅原純撮影)

言語研修

本研究所では、アジア・アフリカ地域の言語の修得のために、本研究所員を中心にその言語を母国とする人、および日本人研究者を講師として、毎年夏、言語研修を開講しています。開講する言語の数は、東京会場が2言語、関西会場が1言語、研修期間は150時間です。最近、言語研修を実施した言語は、次のとおりです（2001年実施決定を含む）。

23頁参照

研修言語名（修了者数）

年度	東京会場	関西会場
1981	ヒンディー語(8), パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12), フィンランド語(21)	パンジャーブ語(8)
1984	ピリピノ語（タガログ語）(12), ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14), カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5), タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10), タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシャ語(10), トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語(20), ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1990	朝鮮語(11), インドネシア語(11)	ペルシア語(14)
1991	エストニア語(12), ビルマ語(15)	中国語(13)
1992	ネパール語(12), アラビア語エジプト方言(15)	フィリピン語(12)
1993	朝鮮語(17), グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1994	ウォロフ語(9), ヒンディー語(11)	トルコ語(22)
1995	アムハラ語(5), チベット語(25)	上海語(12)
1996	タイ語(14), 現代ヘブライ語(12)	ヨルバ語(7)
1997	テルグ語(10), モンゴル語(11)	ハンガリー語(7)
1998	アイヌ語(2), ハヤ語(11)	カンナダ語(5)
1999	フィジー語(4), ペルシア語(10)	ウルドゥー語(5)
2000	シャン語(3), アフリカーンス語(6)	ペルシア語(4)
2001	パシュトー語(), 福州語()	ムンダ語()

研修生（各言語約10名）は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料、受講料を納付することになります。また、課程を修了した人には審査のうえ修了書が授与されます。

上記の研修事業と関連して、より効果的で充実した研修方法を開発するための研究の一環として、科学研究費補助金による支援を受けつつ、言語研修において自動学習機器に合わせて機械化しうる部分をプログラム（CAI）化するための研究を実施しています。この研究によって開発した「CAIプログラム」は、研修コースのなかで補助教材として活用することが期待されるばかりでなく、必要に応じて希望する言語の学習をすすんで個人的に受講できるよう設営することにより、増大し、多様化する社会要請に応えることをめざします。

施 設

情報資源利用研究センター

本研究所では、1978 年にメインフレーム・コンピュータを導入するなど、常に最先端の情報技術を活用した言語文化研究をめざしてきました。かつては、アジア・アフリカの言語を対象にした自然言語処理が中心でしたが、現在は、1997 年 4 月より本研究所に情報資源利用研究センターが設置されたことにより、コンピュータ処理の対象が、従来のテキストを中心から、音声・静止画・動画をも含んだマルチメディアに移行しつつあります。

センターの目的のひとつは、研究成果の促進や新しい研究手法の開発の基盤整備のために、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源を有機的に統合し構築することです。そして、構築された情報資源をインターネットなどのネットワーク環境で、全世界に向けて公開することをめざしています。この目的のために、高性能ワークステーションの導入や、大容量のデータを加工・保存・管理できるハードウェア・ソフトウェアの導入を積極的に進めています。

10 頁参照



図書室

日本における唯一の、大学附置の人文科学系共同利用研究所である本研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を、1964（昭和39）年の創設以来収集してきました。

この間、民族の独立、対象地域の複合化、研究手段の高度化等、当該地域に関する研究の諸条件は大きく変化してきました。この現況を考慮しつつ、内外の研究機関、大学等より参集する共同研究員等の需要に応えるため、多様な資料を収集しています。海外研究機関（約50カ国、150機関）との寄贈・交換による資料をも継続的に収集しています。また、本学の教職員、大学院博士後期課程在籍者に対する貸出しや本学の学生およびその他の機関、他大学の教官、学生に対する閲覧サービスもおこなっています。

2001（平成13）年3月末現在、蔵書（備品資料）の総数は94,026冊、マイクロフィルム10,020リール、マイクロフィッシュ31,390、雑誌は約1,220タイトル等です。蔵書のなかには、アジア・アフリカ等諸地域の教科書や世界各国語の聖書をはじめ、イランの主要新聞（19世紀末-1970年のマイクロフィルム：65種）や19世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバーを多数揃えており、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌：第2版」、19世紀「カイロ石版画集」、晚清（中国）製糖画集、トリピタカ（カンボジア語版・南伝大藏經）等々、他の研究機関には見られない貴重な資料も所蔵されています。

また外国雑誌の収集には、特に留意し、欠号補充等の努力を続けています。

なお、本研究所には現在、下記5種の文庫があります。

山本文庫：1967（昭和42）年受入

著名な満洲語学者、故山本謙吾氏（1920-1965）の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献（和・洋書計598冊）を含む。

郎氏（1905-1987）の個人蔵書で、モンゴル民族の生活と習俗に関する文献（和・洋書計1,671冊）を含む。

浅井文庫：1970（昭和45）年受入

著名なオーストロアジア言語学者、故浅井惠倫氏（1895-1969）の蔵書。アジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類・雑誌等（和・洋書計870冊）をはじめ、高砂族関係の貴重な言語資料、ニューギニアの民族写真その他（アルバム、ノート、原稿、書簡、直筆辞書、単語カード、未発表の高砂族伝説集索引カード等）を含む。

前嶋文庫：1986（昭和61）年受入

わが国におけるイスラム研究の創立者の一人である故前嶋信次氏（1903-1983）の個人蔵書のうち、和漢書1,272冊を受け入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記などを含む。

王文庫：1993（平成5）年受入

著名な台湾言語学者、故王育徳博士（1924-1985）の個人蔵書で、台湾の言語学、文学、歴史、政治関係の諸文献を中心にしたコレクションである。歌仔戲、1950年代から1980年代にかけて日本で展開された台湾独立運動家が発行した雑誌やパンフレット、台湾で発行された党外雑誌や王博士の手稿など貴重なものを多数含む。（和・中・洋書等計3,163点）。

小林文庫：1976（昭和51）年受入

著名なモンゴル史研究者である故小林高四

音声学実験室

音声学実験室には、音声言語の性質・特徴や発話の調音状態を観察し記録するために次のような機器が用意されています。

パーソナルコンピュータを用いた音声分析プログラムでは、音声の各時点ごとの構成周波数の変化や強さを濃淡模様で表示するスペクトログラフや基本周波数の抽出ができます。スペクトログラムでは従来の機械式のそれと同様に用途に応じてワイド・バンド、ナロウ・バンド、セクション、音圧の表示ができるうえに、基本周波数を連続的にプロットして表示することもできます。基本周波数測定は測定したい範囲を音声波形上に指定してもできますが、スペクトログラム上の範囲指定もできますので、基本周波数と音節との対応が容易になります。もちろん、各時点ごとの測定値も表示できます。画面の時間表示も自由に変えることができますので、数文にわたるピッチ変化のようなデータも、また音節内のピッチ変化のような詳細な測定を要するようなデータも画面に表示できます。1サンプルの最大録音時間はサンプリング周波数やコンピュータのメモリーによって異なりますが、現在のシステムでは10kHzを上限とする測定(20kHzサンプリング)のためのデータで最大約10分間可能です。さらに、ある音声データを他の音声データの任意の部分に付加したり、またある音声データからその一部を切り取ったりすることも可能ですし、音声データの特定の部分のみを繰り返し聴取することもできます。

エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を観察し記録するための機器です。32個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、各時点ごとの電極と舌との接触状態を、前面パネルに口蓋状に配列したランプの点滅で示してくれます。もちろん、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、ビデオテープ編集機やカセットテープを高速に複製するテープ・デュプリケーターが、フィールド調査で録音されたテープの複製作成や言語研修用テープの作成のために用意されています。また、良好な条件での発話資料を録音するために、防音室や各種のテープレコーダーも用意されています。

附属施設の音声・言語研修資料室には、フィールド調査で収集された世界の珍しい言語や貴重な民話、民族音楽などのテープやレコードをはじめ、これまでの言語研修テキストのテープ、アジア・アフリカ地域の諸言語の語学テープとレコードが整理・保管されていて、研究者の利用の便を計っています。

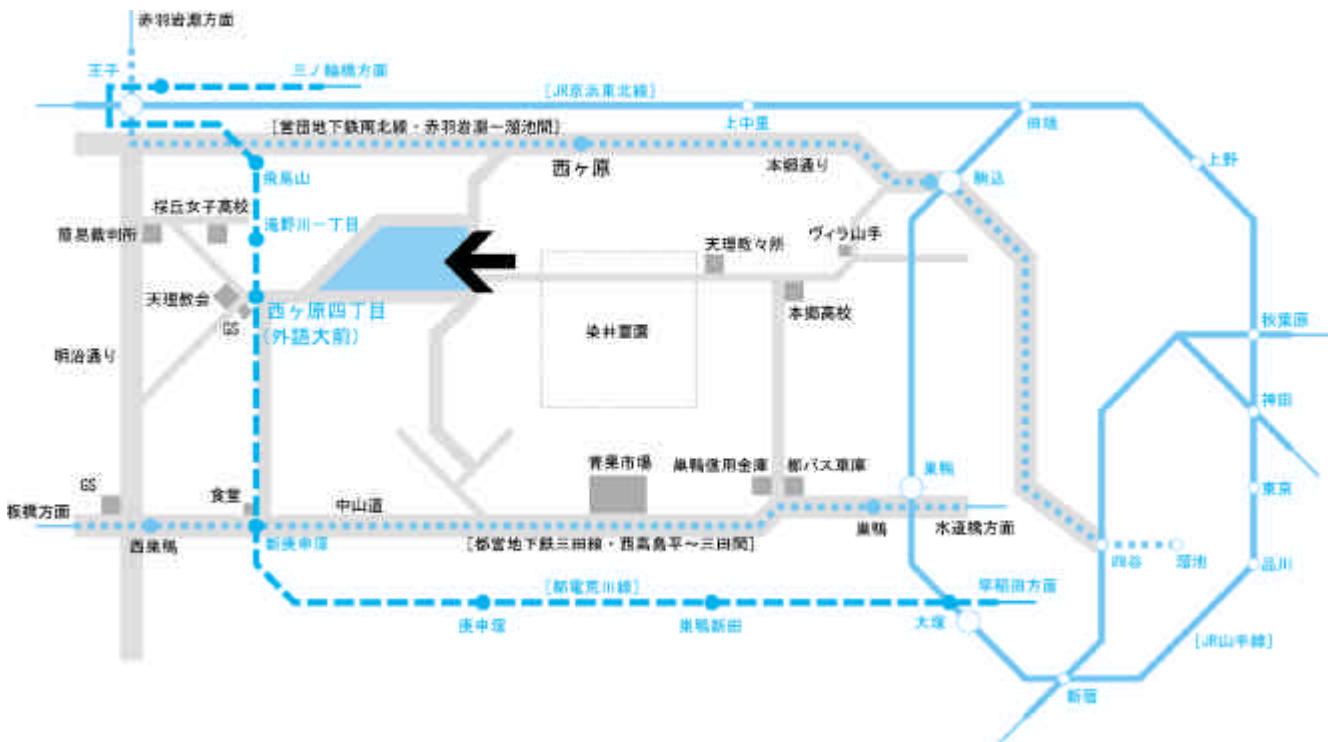
アジア・アフリカ言語文化研究所のホームページのお知らせ

本研究所では平成6年度からホームページを開設しています。

本研究所の研究会の案内や研究活動の詳細、研究成果の出版物一覧など、最新の情報を提供しています。どうぞご覧ください。

ホームページのアドレス：<http://www.aa.tufs.ac.jp/>

交 通 案 内



交通機関

1. 【JR・都電荒川線】利用

- (1)JR山手線を大塚駅で下車。都電(荒川線)三ノ輪橋方面行きに乗り換える。
4つ目の西ヶ原四丁目(外語大前)で下車し、踏切を渡る。徒歩約3分。
- (2)JR京浜東北線を王子駅中央口で下車。都電(荒川線)早稲田方面行きに乗り換える。
3つ目の西ヶ原四丁目(外語大前)で下車し、前方左手へ徒歩約3分。

2. 【地下鉄・徒歩】利用

- (1)都営地下鉄三田線を西巣鴨駅で下車し、徒歩約10分。
- (2)都営地下鉄南北線を西ヶ原駅で下車し、徒歩約15分。

3. 【JR・徒歩】利用

- (1)JR山手線を巣鴨駅または駒込駅で下車し、徒歩約15分。
- (2)JR京浜東北線を王子駅南口で下車し、徒歩約20分。

アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国语大学

〒114-8580 東京都北区西ヶ原4丁目51番21号
Tel. 03-5974-3667, Fax. 03-5974-3838

移転のお知らせ

本研究所は、新キャンパス建設に伴い、
平成14年1月に下記住所に移転する予定です。

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1